性重複癌が疑われたが，組織学的に乳腺腫瘤はscirrhous caを伴うlobular adenocarcinomaであり，子宮頚部も乳腺組織と同じ組織が検出された．以上より原発性乳癌の子宮頚部および肝転移と診断された．

原発巣および子宮頚部転移巣に対して放射線治療と化学療法を併用して，良好な腫瘤縮小効果が得られた．現在肝転移に対し化学療法を継続中である．

12. スルピリド服用による悪性症候群の1例

（消化器内科）
○植田　美加・長原　　光・竹村　尚志・加藤　純子・川瀬千津子・大原　　昇・小幡　　裕

症例は64歳男性．慢性膵炎，糖尿病の診断のもと，腹痛の原因および悪性腫瘍の検索を目的に入院した．逆行性膵管造影施行3日後，突然39～40℃の発熱と意識障害と軽度の筋硬直が出現した．抗生剤，解熱剤にても解熱はみられず，その2日後，血圧の低下，PaO_2・$PaCO_2$低下，尿量の減少をきたし，ショック状態，急性腎不全となった．この間，アミラーゼ，リパーゼの上昇はなく，腹部エコー上著変なし．血液，尿，咽頭，痰，便培養は全て陰性で，腰椎穿刺にて髄液細胞数4/3，頭部CT上脳浮腫も認められなかった．生化学データ上CPK 2,144mU/mlと高値を示し，WBC 34,780/mm³，CRP 34.4，BUN 96.9mg/dl，Cr 4.1mg/dl，血中ミオグロビン500μg/mlであった．敗血症，髄膜脳炎等否定的で，発熱6日前よりスルピリド（®ドクマチール）服用していたこと，精神神経症状，CPK，ミオグロビン異常高値等より，スルピリドによる悪性症候群と診断し，服用を中止した上，ダントロレンナトリウム・ブロモクリプチン投与を開始した．発症6日後，FDP 200μg/ml，血小板5万/mm³でDICをきたし，発症8日目には喀痰による気道閉塞で呼吸困難におちいり，気管挿管，レスピレーターによる呼吸管理を施行した．脈拍は180まで上昇し心房細動も併発した．しかし発症12日目にはARF，DIC等改善し始め，約3週間後には意識も含めての症状の改善がみられた．

スルピリド単独による悪性症候群は報告が少なく，しかもこの症例のように重篤な症状を呈した例は極めて稀と考えられたので，報告した．

13. 当科における救急外来患者の臨床統計的観察

（歯科・口腔外科）
○千葉　昌子・片海　裕明・名取　正喜・野口　佳芳・長谷川直美・安藤　智博・桑澤　隆補・三宮　慶邦・扇内　秀樹

今日の医療のなかでも，救急医療は地域住民にとって最も重要視されていることのひとつである．1978年本学に救急医療センターが開設され，当科も歯科口腔外科領域における救急患者の診察に携わっている．

今回私達は，当科における救急患者の実態を把握するために過去6年間における臨床統計的観察を行ったのでその概要を報告する．

対象は，1983年1月1日より1989年12月31日までの6年間に東京女子医大救急医療センターにおいて歯科口腔外科を受診した総計4,835名である．

〔結果〕

年度別では，1983年644名，1984年672名，1985年778名，1986年875名，1987年929名，1988年937名，1989年989名と年々増加の傾向を示した．

性別では，男性3,219名，女性2,605名で男女比は1：0.81であった．

年齢別では20歳台が最も多く30.4%を占め，次いで10歳未満の18.8%，30歳台の14.6%の順であった．

疾患別では歯の支持組織疾患が最も多く全体の44.6%を占め，次いで外傷が28.0%であった．また救急車での来院は385名であり，外傷，急性炎症が多く，入院に至ったものは212名であった．

救急患者の住居地域は，都内が87.1%で新宿区はそのうち53.8%を占めていた．

14. 真皮欠損用コラーゲン型被覆材

（形成外科）○下田　勝巳・東山　卓嗣・野崎　幹弘・平山　　峻

Yannas, Burkeらはグリコサミノグリカンを添加したコラーゲンを材料として，新しい人工皮膚（Stage I膜）を開発したが，コラーゲンの生体内での分解を抑えるために過度の架橋を施しており，これによりコラーゲンの持つ高い生体親和性を低下させている．

我々は，化学架橋を施さず，短時間熱脱水架橋のみ行なった繊維化アテロコラーゲン（以下FAC）と熱変性アテロコラーゲン（以下HAC）の複合物が家兎皮下で早期に繊維芽細胞と毛細血管を呼び込み，コラーゲンの形態も真皮様組織になることを見出した．本研究では，この材料を用いて三層構造の真皮欠損用創面被覆材（人工真皮）をデザインし，家兎全層皮膚欠損層に適用して，組織学的検討を加えた．

実験

家兎（BW 2.5～3.5kg）をエーテル麻酔下に，背部皮膚を切除した．牛アテロコラーゲン凍結乾燥真皮（再